

自ら学びに向かう子

1 研究主題設定の理由

本校では、令和4年度から研究主題を「自ら考え、伝え合う子の育成」とし、研究を進めてきた。

この研究主題のもと、昨年度は「個別最適な学びのための手立て」と「協働的な学びのための手立て」の2つを重点として取り組み、国語科を中心に研究を積み重ねてきた。

成果として、単元のゴールのモデルを具体的に示したり、多様な学習方法を提示したりすることで、児童が見通しをもち、学習方法を自己選択して、主体的に取り組む姿が見られるようになってきている。また、交流する際には、自己決定する場（時間・方法・相手など）を設定したり、ICTを活用し互いの考えを可視化したりできるようにしたことで、必要感のある交流が見られるようになってきている。

しかし、一定の成果が見られる一方で、本校の課題として挙げられたのは、まだまだ教師主導の授業が多く、児童が課題に対して受け身であり、粘り強く自分から学びに向かい、解決しようとする力が不十分なことである。また、児童が学習方法を選択し学びを進めるようにしたことで、教師が個々の学習状況を見取り、個に応じた指導・支援が十分でなかった点も挙げられる。

今年度、本校の授業の取組として最も必要なのは、児童が課題に対して「やってみたい、おもしろそう」など興味関心をもち、意欲的に自分から学びに向かうことである。そして、児童が自分ごととして課題（問題）発見をして、どうしたら課題解決ができるか、試行錯誤しながら最後まで粘り強くやり切ろうとする姿を目指していきたい。単元や授業の最後には、自己の学びを振り返り、「わかった・できた」と実感し、次への学びの意欲をもつことができるようにしていきたい。

このような児童の姿を全教職員で目指していく。そのため、今年度の研究主題は「自ら学びに合かう子」とし、「自ら考えたいと思わせる工夫」と「わかった・できた」に迫る工夫」の2点を研究の重点として、国語科を中心に学校研究を進めていく。

2 目指す児童の姿と研究の重点をもとにした朝日授業デザイン

（1）目指す児童の姿

授業における「自ら学びに向かう」具体的な姿を、以下の姿と捉える。

- ・「どうして?」「やってみたい」「おもしろそう」など、課題に興味関心をもって取り組む姿
- ・一人一人が自分の課題を解決するために、学び方を自己決定し、自分のペースや力で学習を進めていく姿
- ・個別や協働の学習過程において、試行錯誤しながら進んで学びを進めていき、粘り強く課題を解決しようとする姿
- ・課題解決するために、他者（友達・地域の人・先人・本など）との対話により、自己の考えを広げたり、より妥当な考えにしようとしたりする姿。
- ・自己の学びを振り返り、学びの成長に気付いたり、次の学びへの意欲をもったりする姿

このような、「自ら学びに向かう子」の姿を実現するためには、毎回の授業において、児童が課題に対して必要感をもち、最後まで粘り強く取り組むことができるようにすることが重要である。そのために、教師は個々の興味関心や学習状況を見取り、個に応じた支援をしていく必要が

ある。単元、授業の最後には、児童が「わかった・できた」と達成感をもち、学びの自覚化につなげることを目指していく。

（２） 研究の重点

重点１：自ら考えたいと思わせる工夫
重点２：「わかった・できた」に迫る工夫

【重点１】自ら考えたいと思わせる工夫（★は最重点指導項目）

★必要感のある導入

- ・考えたくなる言語活動の工夫
- ・見通しがもてる単元・本時計画
- ・既習提示の工夫
- ・モデルの提示
- ・個々の学習状況に合った手立て
- ・個々の興味関心に応じた手立て
- ・ヒントカードの用意

【重点２】「わかった・できた」に迫る工夫

★一人一人の児童に合わせた支援（声かけ・発問・問い返し）

- ・学び方の選択（いつ・誰と・どのように学ぶのか）
- ・相手意識と目的意識を明確にした必要感のある交流
- ・交流のモデルの提示
- ・教師の見取り（学習状況の把握・価値付け・C→Bの手立て）
- ・学びの自覚化 振り返り

（３） 朝日授業デザイン

- ・国語科を中心として、質の高い言語活動を設定し、単元全体を見通した授業デザインを推進していく。
- ・単線型（同じ課題を解決するために、みんなで学習形態や学習方法を考え、自己決定しながら学習を進めていく）や複線型（一人一人が自分で選択した課題を解決するために、学び方を自己決定し、自分のペースや力で学習を進めていく）の授業を通して、児童が自ら学びに向かうことができるようにする。
- ・児童が自ら学びに向かうことができるよう、４・５月は「学びの土台」を重点的に指導していく。単元内の複線型の学習過程に必要な「学び方」「見方・考え方」が身に付くよう、繰り返し指導を行い、積み上げを行っていく。
- ・１時間の授業のねらいを教師が明確にもち、指導、支援を行っていく。
- ・授業の中での児童の発話量、活動量を増やしていく。
- ・授業の終末では、一人一人が学びを自覚できるよう、まとめや振り返りの時間を十分に確保していく。

重点1

自ら考えたいと思わせる工夫

重点2

「わかった・できた」に迫る工夫

	単線型	複線型
導入 5 ～ 10分	前時の振り返り・学習過程の確認 ○ペア・グループ・挙手で確認（簡潔に） 問いを見つける ○これまでとの違い・ズレ ○児童の意欲を高めるような教材・教具の提示、場の設定 課題をつくる ○児童の言葉で ゴールの見通し ○具体的な姿 ○付けたい力の明確化	前時の振り返り・学習過程の確認 ○一人一人が確認 問いを見つける ○一人一人が解決したい課題を設定 課題をつくる ○児童の言葉で ゴールの見通し ○具体的な姿 ○付けたい力の明確化
展開 20 ～ 30分	同じ課題を解決するために、みんなで学習形態や学習方法を考え、自己決定しながら学習を進めていく 〔課題について 学び方を自己決定〕 ★解決するための支援	一人一人が自分で選択した課題を解決するために、学び方を自己決定し、自分のペースや力で学習を進めていく 〔自己選択した課題について 多様な学び方から自己決定〕 ★自走するための支援
終末 10 ～ 15分	まとめ ○付けたい力が身に付いたかを意識（課題との整合性） ○児童の実態に合わせて（キーワード・条件をつけて・自分の言葉で） ○一人一人が自己の目標を達成 振り返り ○学びの自覚化（変容を意識） ○次の学習への意欲	まとめ ○付けたい力が身に付いたかを意識（課題との整合性） ○児童の実態に合わせて（キーワード・条件をつけて・自分の言葉で） ○一人一人が自己の目標を達成 振り返り ○学びの自覚化（変容を意識） ○次の学習への意欲

学び方の選択

誰と（形態） どこで（場所） 順序
方法（端末・ワークシート・ノートなど）
時間配分

何を（対象）

考えのもと

知識・経験・既習・関連図書・インターネットなど

見方・考え方を促す

着目する視点を与える
声かけ・問い返し

協働的な学び（交流）

友達・地域など
教師によるコーディネート

3 研究構想図

